

## 【東京】法医学者と形成外科医の「二足のわらじ」を続ける理由-奥田貴久・日本大学医学部社会医学系法医学分野教授に聞く◆Vol.3

「臨床経験者にこそ法医学に進んでほしい」

2025年12月15日（月）配信 m3.com地域版

2020年、日本大学医学部（板橋区）社会医学系法医学分野の第3代教授に就任した奥田貴久氏。形成外科医として10年間の臨床経験を積んだのち、2011年に法医学へと転じた経歴を持つ。現在も、週に1～2回は形成外科として臨床に従事する奥田氏。二足のわらじを履き続ける理由や、臨床と法医学の経験が交わる瞬間について話を聞いた。

（2025年10月6日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



奥田貴久氏

### 「法医よりも臨床医の方がはるかに大変」

——形成外科と法医学には共通点はありますか。また、異なる点は何でしょうか。

共通点はそう多くありませんが、あえて挙げるとすれば「体表を観察する点」だと思います。法医学では、遺体の外表をくまなく調べ、損傷があれば、その原因や受傷の経緯を細かく考察します。一方、形成外科も体表を扱う診療科ですので、日頃から皮膚や創傷を診てきた経験が、法医学での観察に生かされていると感じます。例えばご遺体を目にして「この陰部と殿部のただれは接触性皮膚炎と褥瘡でネグレクトされてたな」といった判断が瞬時にできるのは、体表の専門家として培った知識と経験があるからです。

もう一つの共通点は、「仕事の細かさ」でしょうか。法医学では、一見どうでもよさそうなことも丁寧に確認し、あらゆる可能性を考えながら所見を記録していきます。そうした細やかさは、形成外科での仕事にも通じる部分があります。もともと私は几帳面な性格ではないのですが、形成外科の現場で「仕事だからきちんとやる」という姿勢を身につけたことで、法医学の場でも同じように粘り強く取り組めるようになりました。その意味では、形成外科を経て法医学に進んだのは、自分にとって良い流れだったと思います。

違いについては、言うまでもなく、臨床医学と社会医学という立場の差にあります。臨床は「治すこと」が目的であり、患者さんの満足度を重視して治療方針を立てます。一方、法医学は「鑑定すること」が目的で、病気や事故の経緯を明らかにすることがゴールです。つまり、目指す方向が根本的に異なります。

それぞれに違った大変さがありますが、私としては、法医よりも臨床医の方がはるかに大変だと思います。全国でも150人ほどしかいない法医学者は、医師の中でも特別視されがちですが、生きている患者さんを相手に日々治療に当たる臨床医の責任の重さは、法医とはまた異なる次元のものだと感じます。

## 二足のわらじが支える、臨床スキルと心のバランス

——法医学を専門とする現在も、形成外科の診療に従事しているそうですね。今なお臨床に身を置いている背景にはどのような思いがあるのでしょうか。

現在、市中病院で週に1~2回、非常勤の形成外科医として勤務しています。その際は、局所麻酔による小手術など、その日のうちに完了する業務を担当しています。美容医療の二重術のように、短時間で結果が完結する処置もその一例です。入院や経過観察を要するケースは常勤医にお願いし、勤務日以外に「自分が診た患者さん、どうなったかな」と気にせずに済むよう、最初から完結型の仕事に限って引き受けています。

臨床の現場に立ち続けているのは、医師の仕事の原点である「患者さんを治療して良くしていく」という感覚を忘れないためです。もし途中で形成外科医を完全にやめてしまっていたら、今頃はもう手技も感覚も鈍っていたと思います。週に1回でも臨床を続けていることで、技術や判断力を保ち続けられていると感じます。

もう一つは、気持ちの面でのバランスを取るためです。法医学では、自ずと亡くなられた方と向き合う時間が長くなります。もちろん法医学はとても意義のある仕事ですが、私自身、もともと特別な憧れを持ってこの道に進んだわけではありません。どうしてもご遺体ばかりを目にしていると、気持ちが塞ぎ込みがちになることもあります。そのため、生きている患者さんに関わる時間を持つことで、気持ちをリセットし、心のバランスを保っているのです。

## 臨床経験者こそ歓迎したい、法医学の新しい担い手

——医学生に対して「まずは臨床を経験してほしい。そのうえで法医学に興味があれば来てください」というスタンスで接しているそうですね。

医療の基本姿勢は、患者さんに思いやりを持って接し、治療を行うことです。生きている人が回復していく姿や、治療のいかなく亡くなっていく現場を実際に見る経験は、法医学者にとっても非常に重要です。そうした現場を知っているからこそ、死に至るまでの経過や要因を、臨床的な視点から多角的に考察できるようになるからです。ですから、まずは生きている人を治療するという経験を積んでほしいと思っています。

そして、チーム医療などを通して多様な経験を重ね、臨床の現場をしっかりと見つめたうえで、「少し違う角度から医療や社会に貢献したい」と感じた方に、ぜひ法医の道を選んでほしいと考えています。そうした方はきっと、法医学の仕事を長く楽しく続けられると思います。どのような経験であっても、その人の個性や強みになるはずですから、臨床経験を持つ方を歓迎しています。

### ◆奥田 貴久（おくだ・たかひさ）氏

2001年日本医科大学卒業、同大形成外科学教室に入室。2005年に大学院医学研究科に進学、2011年同大形成外科学助教・講師、トーマス野口氏と出会ったことが転機となり、法医学の道に進む。2013年メリーランド大学医学部法医病理学へ留学し、米国法医制度の下で解剖、現場検証の研さんを積む。2015年日本医科大学法医学講師、2017年同准教授を経て、2020年より現職。

【取材・文＝久保 圭】（写真は本人提供）

